

# 養護教諭の実践力育成にむけた学生の学びの検討

—ゼミナールにおける自然体験活動を取り入れた実践から—

Study of students' learning toward  
nurse teacher's practical skill development  
—From practice incorporating nature  
experience activities in seminar—

心理カウンセリング学科 中村 直美  
Naomi NAKAMURA

## 1. はじめに

近年のグローバル化や情報化等が進展する中、社会全体で様々な課題が生じ、学校教育においても複雑で多様な教育課題が顕在化している。変化の激しい時代にあつて、子どもたちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育成する教育を行うことが、学校教育に求められてきている。さらに教員に対して、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が求められている。<sup>1)</sup> 近年、教員養成においても実践的指導力のある教員の育成がクローズアップされ、養護教諭においても実践的指導力の育成を目指した教育の充実が求められている。

これまでの養護教諭の養成における実践的指導力の形成に関する研究の多くは、学外で行う養護実習やその事前事後指導について検討がなされている。菊池・佐島 (2004)<sup>2)</sup> は、実践的指導力について、短期大学における養護教諭の「教育実習事前事後プログラム」の実践過程を検討し、教育実習が学生の子どもの理解力、教材研究力、授業構成力などへの関心と理解を深める機会となることを明らかにした。一方、養護教諭の実践力育成を目指す先進的な取組として、後藤の「仮想学校」づくりを基盤とした養護活動実習があげられる。後藤 (2010)<sup>3)</sup> は、養護教諭の実践力を「児童・生徒等の心身の健康の保持増進をはかるために目的を持って意識的に行う教育活動の教育的価値を省察し熟考する力量」と概念付け、諸科学の知見を総合して具体的な問題を実践的に解決する能力の養成を目指した。後藤の「仮想学校づくり」の実践は、養護教諭の実践力を育成する上で、場面設定の現実性（リアリティー）が重要な意味をもつことを示唆した。ここで使われている「省察」とは、問題状況の認識、教育活動の振り返り、反省を通して実践的知識を獲得していくことである。また「熟考」とは、「理論的な概念や原理を実践の文脈に対応して翻案する思考過程」である。佐藤学 (1998)<sup>4)</sup> はこの「2つの実践的思考によって、問題解決過程における理論と実践の相互作用を実現できる」としている。

以上のことから、養護教諭の実践力を育成するためには、実践的な体験の場を設定し、実践を振り返り省察を深めていくことが重要であると考え。そこで本稿では、養護教諭を目指す学生の実践力育成を図るため、筆者が担当するゼミナールの学外学修において、小・中学生の自然体験活動を想定した宿泊学習の実践を紹介する。そして、自然体験活動を取り入れた体験的活動を通じた学生の学びについて検討することを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 対象者

T大学で筆者が担当する「ゼミナールI」履修者の3年生。いずれも養護教諭を目指す5名。

(2) 小・中学生自然体験学習を想定したプログラムの作成

1泊2日の小・中学生のN県青少年自然の家における自然体験学習を想定し、学生が学校職員の立場となって企画した。その後、養護教諭の立場となってプログラムを見直し、5回のディスカッションの上、修正を加えた。また、子どもが使用することを想定したしおりを作成した。

なお、作成にあたっては、学生の主体性を重視し、学生から宿泊体験する施設の職員に連絡をとり情報収集したり、学生同士で協議したりしながら実施計画を立案した。指導者は学生からの質問に対してのみ、回答したり助言を与えたりした。

(3) 自然体験活動を取り入れたプログラム

自然体験の学習で、以下の4点を軸にプログラムを実施した。プログラムの概要を、Table 1に示す。

		Table 1 学生が作成した自然体験プログラムの概要	
ねらい		・自然に触れながら、様々なワークショップに取り組み、けがや事故に気を付けながら楽しむ。	
		・組、クラス、学年全体で絆を深める。	
		1日目	・青少年自然の家 館内オリエンテーリング ・源流体験 ・野外炊飯
			・講義「不適応の子どもが参加する自然体験活動の実際」講師：青少年自然の家職員
主な活動内容	2日目	・青少年自然の家 朝のつどい	
		・A小学校保健室訪問 講話「自然体験活動における養護教諭の役割」講師：養護教諭 (A小学校の特色：山に囲まれた小規模校で、地域全体でスキー活動を盛んに取り組んでいる)	
	3日目	・B中学校保健室訪問 講話「子どもとつくる自然体験活動とその意義」講師：養護教諭 (B中学校の特色：海沿いの中規模校で、小・中学校が連携し、地域の海祭りの運営に児童・生徒会が積極的にかかわっている)	
		・振り返りディスカッション②	
計画した内容の項目	教職員向け	1 ねらい 2 期日 3 場所 4 参加者 5 日程(行程・活動内容・点呼・係活動含)	
		6 日程の雨天案 7 交通手段 8 費用 9 服装 10 持ち物	
	児童・生徒用	11 緊急時の対応(周辺の病院の情報・想定される傷病の対応含)	
		12 学級での事前指導内容 13 個別対応が必要な子どもと対応内容	
調保事 査健前	ドカ観健   察康	14 その他共通理解事項	
		15 職員連絡網一覧	
ドカ観健   察康	ドカ観健   察康	1 既往歴・現病歴 2 基礎疾患 3 使用している薬	
		4 活動中に配慮すること 5 夜間緊急連絡先	
ドカ観健   察康	ドカ観健   察康	1 名簿 2 日程表に沿った時間枠 3 体調チェック項目	

①小・中学生の自然体験学習を想定した活動：学生が思い描いた計画に沿って、自然体験と宿泊体験する青少年自然の家で直接体験を行った。子どもの立場で体験しながら、学校職員・養護教諭の立場でその役割について考えた。

②2泊3日のプログラムの中で、2回の振り返りディスカッションを設定した。

また、小・中学生の自然体験学習に現地で直接かかわっている方々の話を聞き、学びを深める目的で、以下の③、④についても合宿プログラムに組み込んで計画した。

- ③講義：青少年自然の家の職員から、不適応の子どもを対象に企画実施している自然体験活動の実際と効果について講義を受けた。
- ④保健室訪問：自然体験活動を重視し教育活動を進めている2校の保健室を訪問し、養護教諭から自然体験活動の実際や養護教諭の役割について直接話を聞いた。

#### (4) 事後の振り返りディスカッション

合宿終了後のゼミナールⅠの授業時間(90分)に、「自然体験の学びを通して変化したこと」をテーマにディスカッションした。

#### (5) 分析データの収集方法

分析対象は、自然体験合宿中における2回の振り返りディスカッションの記録、事後の振り返りディスカッションの記録である。収集したデータは、質的帰納的に分析した。対象者の記述から学生の学びについて書かれた文脈を抜き出し、その文脈を意味のある最小限の単位として要約して主な記述内容として整理した。整理した内容について意味内容を読み取り、抽象度を上げ、学びの小項目を抽出し、さらに抽象度を上げ、学びの大項目を抽出した。

#### (6) 倫理的配慮

記録物の分析は授業改善を目的として行うこと、無記名とし個人が特定されないこと、データ入力や集計等については、学生個人が特定できないこと、及び個人情報保護に十分な配慮を行うことを学生に指導者が口頭で説明し、了承を得て実施した。

### 3. 結果

#### (1) 対象者

ゼミナールⅠ履修者は5名であり、そのうち体調不良による不参加1名を除く4名が分析対象であった。

#### (2) プログラム中に実施したディスカッションから読み取れる学び (Table 2)

2回実施したディスカッションの記録を整理した結果、学生の学びとして、3つの大項目が抽出された。すなわち、【自然体験活動の教育的価値】、【健康・安全に向けた教職員の共通理解】、【養護教諭としての役割意識】である。以下に、主な記述内容と学びの小項目を用いながら、学生の学びについて記述する。なお、主な記述内容を「」、学びの小項目を<  >、学びの大項目を【  】で表記する。

##### 【自然体験活動の教育的価値】

学生は、これまで経験した自然体験活動を想起し、今回の小・中学生の自然体験活動のねらいを設定していたが、「考え方が浅かった」と振り返った。「日常から離れた空間で自然に親しみ、互いに助け合い、活動を楽しむ」「実際の体験を通して学ぶことの大切さを実感する」のように、<ねらいの明確化>が図られた。また、学生が実際に雨天の中で自然体験活動を経験したことから、様々な状況であっても「どうやったら目的を達成できるか、子どもの考える能力を高め、教職員として支えていきたい」等、自然体験活動に対する<教職員としての心構え>も明確化された。

##### 【健康・安全に向けた教職員の共通理解】

学生は、これまでの学びを活かし、計画段階から自然体験活動における健康面や安全面の検討を重ね、自然体験活動に臨んだ。しかしながら、現地では「施設を安全に利用するため、子どもに分かるように説

Table 2 自然体験的活動中に実施した2回のディスカッション記録の分析結果

学び		主な記述内容	小項目ごとの抽出数
大項目	小項目		
自然体験活動の教育的価値	ねらいの明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねらいの考え方が浅かった。</li> <li>・自然体験活動の意義をよく踏まえて、子どもから見たねらいにした方がよいと思う。</li> <li>・ねらいを挙げるとしたら、①日常から離れた空間で自然に親しみ、互いに助け合い、活動を楽しむ。②実際の体験を通して学ぶことの大切さを実感する と考える。</li> </ul>	3
	教職員としての心構え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨天の中での自然体験や野外炊飯は困難があるが、互いに助け合って乗り越えていくことの大切さを教職員として支えていきたい。</li> <li>・みんなで目的を達成することの大切さを教職員として支えていきたい。</li> <li>・どうやったら目的を達成できるか、子どもの考える能力を高め、教職員として支えていきたい。</li> </ul>	3
健康・安全に向けた教職員の共通理解	子どもの動きや実態を想定した計画の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設を安全に利用するため、子どもにわかりやすく説明しなければならない。</li> <li>・施設内が非常に広く、子どもの移動時間を考慮していなかった。そのため、時間に余裕がなかった。下見での計時の大切さがわかった。</li> <li>・自然体験では想定外のことが起こるため、休憩時間を十分確保し、しおりにも盛り込んだ方がよい。</li> <li>・施設マップをしおりに盛り込まなかったため、施設マップの他、部屋番号、非常口、集合場所、活動場所をしおりに明記する必要がある。</li> </ul>	4
	教職員としての危機管理意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・施設で想定される災害は、地震、土砂崩れ、山火事が考えられる。</li> <li>・熊などの動物による被害もありそうとても怖かった。</li> <li>・熊に出遭わないような予防と、出遭った時の対処方法を指導しておく必要がある。</li> <li>・実際に急な欠席者が出て、打ち合わせた救急連絡体制が役に立った。</li> <li>・施設が広く、非常口や避難場所がわかりにくい。マップに明示する必要がある。</li> <li>・野外炊飯時の包丁の置場について指導する必要がある。</li> <li>・子どもはすぐに棒を持って遊ぶ。振り回すことが予測されるため、指導が必要</li> <li>・源流体験は、想像以上に危険で、滑る、濡れる、冷える、大けがをするなど危険が多いことがわかった。</li> </ul>	8
	生徒指導の具体化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・着替えに持参する私服の基準を示さないと華美になりすぎる。</li> <li>・持ってきてはいけないものをしおりに明記する必要がある。</li> </ul>	2
養護教諭としての役割意識	日程運営における養護教諭の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際にスケジュールに余裕がない活動になった場合、養護教諭として子どもの心身への負担が大きいことを伝える必要がある。</li> <li>・休憩時間を確保について職員と相談し、スケジュール変更も視野に入れることが必要。</li> <li>・源流探検で衣服が濡れた場合、気温が低い場合、低体温症を予防するため、出来るだけ早く着替えをさせることが大切。</li> <li>・健康観察カードを配る時間、書く時間の設定が必要だった。</li> </ul>	4
	保健指導の目的理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・源流探検に出かける前の保健指導として、ミニリュックに準備するものが多い(汚れてもよい私服、下着、靴下、ビニール袋、虫よけ剤、カットパン、日焼け止め剤)。しおりにも記載し、確認する必要がある。</li> <li>・しおりに載せる保健指導の内容が多い。子どもが見て自己管理できるようしたい。</li> <li>・なぜしおりに載っているのか考えさせ、行動することを支えていくのが養護教諭の仕事である。</li> </ul>	3
	養護教諭の立場からの危機管理意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・源流体験では、岩場で足元が滑りやすく、頭部外傷など命の危険性が高いことがわかった。全職員で共通理解して予防と対応に努めるべきである。</li> <li>・雨天の中の源流体験の場合、低体温症を防ぐため、全員が着替えの準備が必要</li> <li>・雨天の中の源流体験では、すぐに着替えるため、着替え等の荷物を管理する場所の打合せが必要</li> <li>・森の中で救急車の要請方法を養護教諭は適切に判断しなければならない。</li> <li>・野外炊飯時にけがをした場合、自分で手当できる場合と、すぐに申し出て手当てをしてもらう場合について、炊飯開始前に指導する必要がある。</li> <li>・想定される傷病の中に、感染症対応が含まれていなかった。インフルエンザや胃腸炎の対応について職員で共通理解した方がよい。</li> <li>・近くの病院の連絡先を調べたが、重症の場合もある。重症度を施設の職員に明確に伝える必要がある。</li> <li>・夜間の救急体制は、教職員で共通理解する必要がある。</li> <li>・夜間、感染症が疑われる子どもは、どこの部屋で休養するのか、最初から決めておく。</li> </ul>	9

明しなければならない」、「施設内が非常に広く子どもの移動時間を考慮していなかった」、「施設マップをしおりに盛り込まなかった」等、＜子どもの動きや実態を想定した計画の必要性＞を実感した。また、現地で活動することにより、「想定する災害は、地震、土砂崩れ、山火事」、「避難場所が分かりにくい」等の自然災害、「子どもはすぐに棒をもって喜ぶ」、「源流体験は想像以上に危険」等のけがの発生要因についても気付き、＜教職員としての危機管理意識＞が高まった。さらに、子どもが現地で活動する姿を想定し、「私服の基準」、「持ってきてはいけない物」についても気付き、＜生徒指導の具体化＞が図られた。

#### 【養護教諭としての役割意識】

「スケジュールに余裕がない活動になった場合、養護教諭として子どもの心身への負担が大きいことを伝える」、「健康観察カードを配る時間、書く時間を設定する」等、＜日程運営における養護教諭の役割＞に気付いた。また、源流体験活動の際に「ミニリュックに準備するものが多い」、「保健指導内容が多い」と保健・安全面について指導内容が盛り沢山になることに気付き、「子どもが自己管理できるようにする」と指導の改善が図られた。さらに、【養護教諭としての役割意識】を高め、「源流体験では、頭部外傷などの命の危険性が高い」、「雨天の中の源流体験では低体温症を防ぐ」、「感染症の発生の可能性」等、計画段階で想定していなかった傷病名が具体的に挙げられ、「救急車の要請方法」、「夜間の救急体制」について＜養護教諭の立場からの危機管理意識＞が高まった。

なお、小項目ごとの抽出数を比較すると、＜養護教諭の立場からの危機管理意識＞、＜教職員としての危機管理意識＞が他の小項目の抽出数より多くあった。

### (3) 自然体験的活動後の振り返りディスカッションから読み取れる学び (Table 3)

『自然体験的学習の学びを通して変化したこと』をテーマに、変化前と変化後を付箋に書きながら、ディスカッションした。付箋の記録を整理した結果、学生の学びとして、3つの大項目が抽出された。すなわち、【自然体験活動の教育的価値】、【養護教諭としての役割意識】、【養護教諭観】であった。なお、変化前の記述内容は、曖昧さ、疑問、意識の低さ、マイナス面への着目の傾向が含まれているが、変化後の記述内容は、明確さ、前向き、ポジティブ思考、意思決定の傾向が多くみられた。

#### 【自然体験活動の教育的価値】

自然体験活動の教育的価値について、変化前は、主に参加者の立場から「楽しい思い出づくり」、「絆づくり」と捉えていた。変化後は「困難を乗り越える力を養う」「子どもの自信や成長に繋がる」と捉え、＜自然体験活動の教育的価値理解＞に深まりが見られた。また、特別な支援を要する子どもについて、変化前は「自然体験活動を楽しむことができないのではないかと考えていたが、変化後は「自分の役割を意識したり仲間に認めてもらえたりする場となり、仲間との交流が深まる」、「できないことに目を向けるのではなく、子どもの得意なことを見つけ、それを通してかかわっていく」等、＜特別な支援を要する子どもとのかかわり＞が明確になった。さらに、子どもの立場で参加者として自然体験活動行うことで、変化前は「自分にはリーダー的なところがない」、「互いの特技を知らなかった」が、変化後は「自分を開放できてよかった」「今まで以上に絆が深まった」等、＜自他の理解＞が促進された。

#### 【養護教諭としての役割意識】

変化前は、食事場面では「楽しく食べる」ことをイメージしていたが、「食事の様子を通して心身の健康観察」をする重要な場であることに気付いたり、健康観察は「体験活動が目の前にあるとできない」等の問題点に気付いたりした。「カードの配布場所、記入場所、声かけ」、「目的を子どもに意識させて取り組ませる」等の改善策が検討され、＜健康観察の重要性＞についての認識が深まった。また、救急体制について、変化前は「何となく大事」、「何もアクシデントはない」、「日常の救急体制とは別もの」と捉えていたが、変化後は「頭部外傷などの重症事例発症時の動き」を考えたり、「救急車が入り込めない環境の対策」等、危機感をもって＜救急体制づくりの重要性＞に気付いたりした。さらに自然体験活動で救急体

制が機能するには、「日常から職員の誰もがすぐに動ける」救急体制を作る等の具体的な方策を考えることができた。また、変化前は養護教諭の職務を考えた際、「養護教諭独自の活動が多い」、「他の職員の仕事と養護教諭は関係ない」と考えていたことが、変化後には「養護教諭一人では対応に限界」があることに気付き、〈他の教職員との連携の必要性〉を実感した。

#### 【養護教諭観】

養護教諭について考えた際、変化前は「保健室内の仕事のみを行う」、「決められた職務を忠実にこなす」等の〈養護教諭のイメージ〉をもっていたのに対し、変化後は、「積極的な面をもつ」、「学校を動かす力がある」と、主体的なイメージをもつようになった。また、変化前は「子どもとどのように向き合ったらよいか」不安を感じていたが、変化後は、〈養護教諭として育てたい子どもの姿〉が明確化し、「一人ひとりをよくみて理解」し、「自己実現していける子どもを育てたい」という思いをもった。また、変化前は「どんな養護教諭になりたいかは曖昧」、「向いていないのではないか」と考えていたが、特に今回出会った養護教諭から影響を受け、〈目指したい養護教諭像〉が明確化し、「養護教諭の役割をこれからも考えていきたい」、「前向きな気持ちになれた」等、気持ちの変化が見られた。

なお、小項目ごとの抽出数を比較すると、〈自然体験活動の教育的価値理解〉、〈自他の理解〉、〈救急体制づくりの重要性〉、〈目指したい養護教諭像〉が他の小項目の抽出数と比較すると多くあった。

#### (4) プログラム中に実施したディスカッションから読み取れる学びと自然体験的活動後の振り返りディスカッションから読み取れる学びの比較

プログラム中のディスカッションから抽出された学びの項目数の36項と比較し、事後の振り返りディスカッションから抽出された学びの項目数は50項目と多かった。また、学びの大項目で共通に抽出されたものは、【自然体験活動の教育的価値】【養護教諭としての役割意識】であった。さらに、プログラム中では【健康・安全に向けた教職員の共通理解】が抽出されたが、事後には抽出されなかった。一方、事後では【養護教諭観】が抽出されたが、プログラム活動中には抽出されなかった。

Table 3 自然体験的活動後に実施したディスカッション記録の分析結果

学び		主な記述内容「自然体験活動での学びを通して変化したこと」		小項目ごとの抽出数
大項目	小項目	変化前	変化後	
自然体験活動の教育的価値理解		・子どもにとって <b>楽しい思い出</b> 作りになる。	・子どもは <b>困難を乗り越える力</b> を養う。	10
		・子ども通しの <b>絆づくり</b> を深めるものだ。	・子どもは <b>困難を乗り越え、共に喜ぶ</b> 。	
		・ <b>参加者の立場</b> から考えるのみ	・ <b>試行錯誤</b> し、計画を実践できたという経験が子どもの <b>自信や成長</b> に繋がる。	
		・班行動やグループ行動により、 <b>仲を深める</b> ものだ。	・お互いを理解し、 <b>尊重し合う関係づくり</b> ができることがわかった。	
		・遊び気分を味わうものだ。	・源流体験で、子どもは <b>楽しさよりも仲間との協力</b> について強く感じるだろう。	
		・野外炊事は <b>楽しく、美味しい</b> 体験ができるもの	・野外炊事は <b>個性が生かせる</b> 場である。	
		・異なる学年で <b>仲よくなる</b> ため。	・縦割り班で <b>役割を明確にし、仲間同士で助け合う</b> ことで互いに <b>刺激し成長</b> し合うことができる。	
		・子どもの <b>関心・意欲</b> を育てるためにはどうしたらよいか。	・まさに <b>自然体験活動</b> が大きな <b>方策</b> のひとつである。	
		・自然体験活動と <b>生徒の問題行動とのつながり</b> は考えたことがない。	・自然体験活動が <b>問題行動の改善</b> に <b>効果</b> がある。	
		・ <b>食事を作る目的</b> のために係の仕事がある。	・ <b>役割を担いながら成長</b> できる。 <b>意欲が高まり、自己選択・自己決定</b> に繋がる。	
自然体験活動の教育的価値 特別な支援を要する子どもとのかわり		・自然体験活動と <b>不適応の児童生徒の繋がりがわからない</b> 。	・自然体験活動から、 <b>自立・絆・個々の存在</b> が生まれ、 <b>不適応の生徒の力</b> になることがわかった。	4
		・障がいのある子どもは <b>自然体験活動を楽しむことができるのか</b> 。	・自分の <b>役割</b> を意識したり、 <b>仲間</b> に認めてもらえたりする場となり、 <b>仲間との交流</b> が深まる。	
		・活動に <b>参加出来ない子</b> をどうするかという考え	・「できない子をどうするか」ではなく、 <b>全体でどのように向かっていくか</b> という <b>思考に転換</b> していくことが必要である。	
		・特別な支援を要する子どもとどのように接してよいかわからない。	・ <b>できないことに目を向けるのではなく</b> 、子どもの得意なことを見つけ、それを通してかかわっていく。	
自他の理解		・自分には <b>リーダー的</b> なところが <b>ない</b> 。	・自分が棒を持って先頭に立ち、山道を切り拓く <b>役割</b> を担った。 <b>自分を開放</b> できてよかった。	8
		・野外炊飯は <b>楽しく</b> 作りたい。	・自然体験活動でしか得られない <b>感動や成長</b> がある。	
		・ゼミのメンバーと <b>楽しく活動</b> しよう。	・ゼミのメンバーの <b>優しさ</b> を感じ、 <b>本当に良い仲間</b> だと実感した。	
		・源流体験に <b>楽しく参加</b> したい。	・非日常的な環境に置かれ、皆で声を掛け合って <b>ゴールに辿り着き、共に感動</b> することができた。	
		・ゼミの仲間と元から <b>それぞれ仲がよい</b> 。	・これまで以上に互いに <b>認め合った</b> 。	
		・メンバーのことは、よく知っていると <b>思っていた</b> 。	・新たに <b>知らなかった面</b> を知れた。	
		・仲間同士、声を掛け合ってきた。	・学内の活動よりも <b>目に見えやすく、互いに声をかけやすかった</b> 。今まで以上に <b>仲が深まった</b> 。	
		・互いの <b>特技</b> を知らなかった。	・それぞれの <b>得意な面から役割が自然と決まって、協力</b> できることを実感した。	
・活動計画やしおり作りを協力して <b>入念に検討</b> 行い、 <b>万全の準備</b> で臨んだ。	・実際は <b>想定外</b> のことが多かった。しかし、 <b>仲間と話し合</b> って、 <b>調整し、皆が満足</b> のいく <b>合宿</b> を体験出来てよかった。			

学び		主な記述内容「自然体験活動での学びを通して変化したこと」		小項目ごとの抽出数
大項目	小項目	変化前	変化後	
養護教諭としての役割意識	健康観察の重要性	・バイキングで子どもは <b>楽しく食べる姿</b>	・自由に選べることにより、偏った選び方はしないか、体調が食事の摂り方に影響していないか、 <b>食事の様子を通して心身の健康観察</b> をすることが大切である。	3
		・健康観察は、 <b>計画通り</b> にできる。	・体験活動が目の前にあるとできない。タイミング、カードの配布場所、記入場所、声掛けなど、 <b>入念な計画</b> が必要	
			・何のために行うのか、 <b>健康観察の目的</b> を子どもに意識して取り組ませなければならない。	
	救急体制づくりの重要性	・実際の場を出来る限り想定し、最大限にけがや傷病について考えた。	頭部外傷などの重症事例の動きを考えることが必要。救急車が入り込めない環境での対策必要。	7
		・何も <b>アクシデントはない</b> と思っていた。	・急な欠席者が生じ、 <b>実際計画したことが実際の場で活かした。</b>	
		・ <b>事故は起こらないと信じていた。</b>	・包丁の使い方、包丁の置き場所、火の <b>管理、鍋蓋の持ち方</b> 等、事故防止のための安全管理が重要	
		・救急バックの中身は、どの状況でも大体 <b>同じもの</b> が入っている。	・ <b>活動に合わせたバックの中味、見やすさ、数量の検討</b> が必要	
		・何となく救急体制が <b>大事だ。</b>	・ <b>目標を達成するために、養護教諭として救急体制を最も大事にしたい。</b>	
		・救急体制は <b>細かい。</b>	・ <b>子どもの命を守り、安心して活動するために最大限の努力</b> をしなければならない。	
		・救急体制は <b>日常と自然体験活動時は別なもの</b>	・日常から、職員の誰もがすぐに動ける <b>保健管理計画</b> を示し、 <b>自然体験活動でもそれらを活かす。</b>	
他の職員との連携の必要性	・ <b>救急処置は養護教諭独自の活動だ。</b>	・養護教諭一人では <b>対応に限界がある。</b> 他の教職員と連携して取り組む重要性を理解した。	2	
	・日程を考える <b>他の職員の仕事と養護教諭は関係ない。</b>	・子どもの心身を守るには <b>他の教職員との連携</b> の必要性がある。		

#### 4. 考察

本研究は、実践的・体験的な場を設定し、自分たちの実践を振り返ることを通して、養護教諭としての実践力の育成を目指したものである。学生の学びについて検討した結果、特に学びが深まったり具体化したものは、『自然体験活動の教育的価値』、『養護教諭としての役割意識』、『目指したい養護教諭像』についてであった。それらの学びと養護教諭としての実践力との関連について考察する。

##### (1) 自然体験活動の教育的価値と教員としての関わり方

体験活動前、学生は自然体験活動の意義について「楽しい思い出づくり」、「絆づくり」と捉えていた。体験活動後、学生の考えは大きく変化する。それには、自然の家の職員の講義が大きく影響していたと考える。



学び		主な記述内容「自然体験活動での学びを通して変化したこと」		小項目ごとの抽出数
大項目	小項目	変化前	変化後	
養護教諭観	養護教諭のイメージ	・学校職員の中では、立ち位置が低い。	・改善策を発信できる積極的な面をもつ。	5
		・保健室内の仕事のみを行う。	・学校を動かす力があることを理解した。	
		・決められた職務を忠実にこなす職業	・子どもや保護者、地域としっかり向き合っこそ、有意義な活動ができる。	
		・現場の養護教諭を見ると刺激になる。	・自由な発想を生かして、やりがいをもって保健室経営を実践する。	
	養護教諭として育てたい子どもの姿	・育てたい子どもの姿が不明瞭	・自己実現していける子どもを育てていきたい。	4
		・保健室登校の子どもとどのように向き合ったらよいか不安	・一人ひとりをよく観て理解したい。	
		・健康課題の解決方法がわからない。	・子どものニーズに合わせながら役割・ポジションを考え対応していく。	
	目指したい養護教諭像	・知識や情報が不足し、向いていないのではないか。	・自然体験活動と学校保健活動を関連させて、取り組みたい。	7
		・どんな養護教諭になりたいかは曖昧	・なりたい養護教諭の姿が明確化し、前向きな気持ちになった。	
		・子どものサインにどのようにして気付けるのかわからない。	・チャンスを見逃さず、子どもと共に、自発的な活動が出来る養護教諭になりたい。	
		・日頃からインクルーシブ教育について考えていた。	・子どもとの信頼関係を深めることが気付くためのポイントと考える。	
		・養護教諭になりたい気持ちが根幹が曖昧	・これから自分が行っていききたいインクルーシブ教育の大きなヒントを得た。養護教諭の役割をこれからも考えていきたい。	
・養護教諭としての子どもへのかかわりが漠然としていた。		・子どもの努力する姿をよく観察し、出来なくても、手を貸さずに子どもだけで解決できるようにするためのアドバイスをしたい。		
・養護教諭になることに不安を感じる。	・学校生活の中で、一人ひとりの特性（よさ）をよく理解していきたい。			
		・これからは仲間と共に自分の夢に向かいたい。		

「自然体験活動は、自分の役割を認識し他者から認められ、自信を高める機会となる」ことを学んだ学生は、自分たちも野外炊飯での火焚きの名人として、源流体験で道を切り拓くリーダーとして周囲から認められ、自信を深めることを体験した。自然体験活動の意義を自身の体験を通して、理解したと言える。実感をもって理解することで、食事を作る係活動の中でも、自分の役割を果たすことで周囲から認められ、自信を深める機会になるという気付きに繋がったと考える。

また学生は、自然の家の職員から「教職員は一人一人のよさを見付け、高く跳ぶための踏み台になる」という教職員としての心構えを学んでいる。このことが、特別な支援を要する子どもとの関わりで「できないことに目を向けるのではなく、得意なことを見付け、それを通して関わっていく」という具体的な支

援方策に繋がったと思われる。

これらの学びは、様々な教育活動の教育的価値をしっかり押さえ、子どものよさに目を向けながら関わるといった教師としての基本的・根本的な姿勢、態度につながると考える。

### (2) 養護教諭としての役割意識

学生は自然体験活動の事前準備として、計画段階から自然体験活動における健康面や安全面の検討を重ね、自然体験活動に臨んだ。しかしながら、現地では子どもの動きや実態を想定した計画の必要性を実感している。これは、自分が源流体験や野外炊飯などを実際に体験したことによって、得られた気づきである。だからこそ、「養護教諭として救急体制を最も大事にしたい」、「日頃から職員がすぐに動ける保健管理計画に示す」、「職員研修に自然体験活動中の事例を盛り込みたい」という実践的な思考がうまれたと考えられる。

ただ、頭部外傷や感染症、低体温症などが新たに想定され危機管理意識が高まったが、実際に傷病者が目の前にはいなかったため、救急処置の知識や技術を深く学びたいという意識には至らなかった。今後は体験活動のプログラムに傷病発生も取り入れ、事例検討を実施するなどの取組みも考えていきたい。

### (3) 目指したい養護教諭像

体験活動前、学生は「保健室内の仕事のみを行う」、「職務を忠実にこなす」等の狭い養護教諭のイメージをもっていった。今回、自然体験活動を学校教育の中核に据えた学校の養護教諭の講話を聞く機会を設けることで、学生の養護教諭像が大きく変化した。自然体験活動と関連させて、養護教諭が児童生徒とともに積極的な学校保健活動を実施している養護教諭の姿勢や考えを聞き、なりたい養護教諭の姿が明確化することができた。前向きな気持ちを持ち、「仲間とともに自分の夢に向かいたい」という思いをもつ学生もいた。将来に向けて夢や希望をもつことは、学びに対する大きな原動力になる。「養護教諭としての役割をこれからも考えていきたい」という思いを学生はもつことができた。

これらの学びは、養護教諭の立場や子どもの立場になって体験活動を実施したこと、実践を振り返り省察を深めていったことによって、生まれたと考える。学生にとって体験的活動は、活動に内在する教育的価値や配慮事項等を実感的に理解できる場である。実際の活動をイメージし計画を立てる、実践を振り返り省察することが、実践的な思考に繋がったと考えられる。今後も特定の活動や指導方法に限定することなく、様々な体験活動を通して、学生の実践力を高められるよう、養成教育の更なる充実に努めていきたい。

### 引用文献

- 1) 平成9年 教育職員養成審議会第1次答申
- 2) 菊池紀子 佐島群巳：養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究、帝京短期大学紀要(2004)
- 3) 後藤ひとみ：養護教諭の実践力育成に向けた学内実習「養護活動実習」における仮想学校づくりのプロセス、愛知教育大学教育実践総合センター紀要(2010)
- 4) 佐藤学：教師の省察と見識＝教職専門性の基礎、日本教師教育学会年報、第7号(1998)